

第125回核融合会議の結果について

平成9年9月9日
核融合開発室

日時：平成9年9月2日(火) 15:00~17:00

場所：科学技術庁第1、2会議室

出席者：委員 宮島委員(座長)、飯吉委員、石野委員、井上委員、
鹿園委員、関口委員、玉野委員、田村委員、苔米地委員、
中井委員、宮本委員、宮委員、森委員、吉川委員(14名)
一般傍聴者 4名
報道関係者 2名

概要：

1. 関口委員より6月16日にウィーンで行われたIAEA国際核融合研究評議会(IFRC会議)の結果について報告があった。
2. 事務局より第18回日米核融合調整委員会の結果について報告があった。
3. 事務局よりITER計画に係る最近の国際的な話し合いの状況等について報告があり、以下のような発言等があった。

- 工学設計活動の3年間延長については、今までの活動を単に延長して技術的な作業を続けるということではなく、建設にうまくつなげるという観点から3年間を有効に活用すべきであるとともに、ITERが難しい立場にあることを認識して一種の危機管理の観点からの検討も行うべき時期に来ているのではないか。
- 今後の進め方について明るい方向に展開していけるよう知恵を出す必要がある。
- ITER計画の取り組みについては、進める場合もそうでない場合も日本が主導的にやるべきである。
- 米国内ではエネルギー問題が緊急の政治的な問題ではないとの議論があるが、これが世界的な傾向になってはいけない。

4. 平成10年度核融合研究開発関係予算概算要求について、まず事務局より平成10年度の日本の核融合概算要求全体額について報告があり、その後、文部

省より大学等の核融合概算要求について、電子技術総合研究所より平成10年度新規要求課題である「K_rFレーザーによる核融合の研究」について説明があり、以下のような発言等があった。

- K_rFレーザーに関しては、リアクタードライバとしての可能性があり、現在のSuper-ASHURAを高出力、高速点火することに主眼をおいた研究開発は非常に的確である。今後研究進めていくに当たっては、他の技術との比較検討を十分に行って欲しい。

5. 日本原子力研究所太田核融合工学部長よりITER工学R&Dについて、ITER/EDAの7つの大きな工学研究開発の内、特に超伝導コイルを中心に説明があり、以下のような発言等があった。

- 工学R&Dを国際協力で行っている現状において、国際間の輸送などを見ると単独のほうがスムーズにいくのではないかと。また、コストの面で高くなるのではないかと。
- 運搬費等はかかるものの各極の得意分野を分担でき、分担することにより全体のコストは安くなるというようにプラスの面が多い。
- 国際協力で研究開発を行うことは良い面と悪い面があるが、国際協力でなければ出来ないこともあり、有効に効率よく実施して欲しい。

6. 日本原子力研究所安積炉心プラズマ研究部長より原研における炉心プラズマ基礎研究の最近の成果として、JT-60、JFT-2M、シミュレーションを活用してプラズマの解析等を行っている現状について説明があり、以下のような発言等があった。

- VDE（プラズマの垂直移動現象）の解析をどのように行っているのか。
- シミュレーションによる流体モデルによる解析とともに、JT-60を始めとした実験による検証により解析を行っている。

次回会合の日程は、今後調整することとされた。